

浮世絵と描かれた江東③

描かれた江東の寺・神社

江東区深川江戸資料館

浮世絵とは、江戸時代に発展した絵画のことで、「浮世」すなわち当世の風俗を題材に描かれているものを指します。なかでも、美人画・役者絵・名所絵（風景画）が多く描かれました。

江東地域は、土地の成立や発展の過程を背景に寺や神社が多くあります。それらの寺社は、大勢の人々が参拝に訪れる名所です。寺社の建造物、とりわけ特徴的な鳥居や橋、堂などは名所絵のなかにはしばしば描かれました。例えば、当該地では富岡八幡宮の門前の賑わいや洲崎神社周辺の潮干狩の様子、亀戸天神社の境内の様子などが多く描かれています。

本号では、浮世絵に描かれた江東地域の名所のなかから、寺・神社について紹介します。

1. 富岡八幡宮

富岡八幡宮（深川八幡・永代寺とも）は、寛永4年（1627）に長盛法印が八幡宮を創祀し、やがて幕府によって大規模な社殿が造営されたのがはじまりといわれています。寛永19年（1642）には深川八幡まつりが、翌年には神輿渡御がはじまります。

上図は、富岡八幡宮の二の鳥居と左右に並ぶ茶屋などが描かれ、賑わう様子が窺えます。周辺には二軒茶屋の伊勢屋や松本、土橋の平清などに代表される料理茶屋が建ち並び、当地は信仰と娯楽の地として名所となりました。

また、上図は「浮絵」という手法で描かれているのが特徴です。浮絵とは、西洋の透視遠近法を導入したもので、空間の奥行や距離感を強調した絵のことをいいます。絵の手前側の風景が浮いたように見えることから、浮絵と呼ばれています。

貞享元年（1684）より、当地では勧進相撲が催されています。勧進相撲とは、江戸時代に寺社などの建立・修築資金などを集めるために行われる相撲のことをいいます。勧進相撲は、相撲を職業とする力



歌川国虎「浮絵深川富岡八幡宮之図」
江東区教育委員会蔵

士たちによって催され発展していきました。寛政元年（1789）の勧進相撲の折には、初めて土俵上において谷風梶之助と小野川喜三郎両力士の横綱伝授披露と横綱土俵入りが行われました。

さらに、富岡八幡宮の別当寺であった永代寺では、成田山新勝寺の出開帳がたびたび行われました。出開帳では、代々の市川團十郎が永代寺を訪れ、取り持ち役（世話人）を務めることもありました。

2. 三十三間堂

三十三間堂は、京都の蓮華王院三十三間堂を模して寛永19年（1642）、浅草に建てられました。その後、大火により焼失し、元禄14年（1701）深川の地に再建されます。堂の規模は、南北が66間（約118.8メートル）、東西は4間（約7.2メートル）で四面廻り縁でした。

京都の三十三間堂は、江戸時代の初期より、長い軒先を矢で射通した数を競う「通し矢」と呼ばれる競技が有名です。深川でも堂の西側において、距離や時間、矢の数などさまざまな種目で通し矢が行われ、門前には岡場所が建ち、深川を代表とする名所として賑わいを見せるようになりました。

その後、当寺は大風雨や火災、地震で破損し、そ

の都度再建や補修が繰り返されましたが、明治5年(1872)に破却されました。

三十三間堂は富岡2丁目付近にあり、現在跡地にはモニュメントが建っています。

3. 洲崎神社

洲崎神社は、元禄13年(1700)に5代将軍徳川綱吉の生母桂昌院の守本尊である弁財天を祀るために弁天像を江戸城紅葉山から移し、洲崎に建立したといわれています。

洲崎の地は埋め立て地で、弁天社は海岸に面した土手の先端に位置していました。その立地から眺望がよく、初日の出や秋の月見の名所としても知られていました。また、潮干狩の名所としても知られ、行楽にも適したことから江戸名所として人気を集めます。石垣土手には水茶屋が並び、境内周辺には料理茶屋がありました。その様子は、当時の浮世絵などに多く描かれています。

4. 亀戸天神社

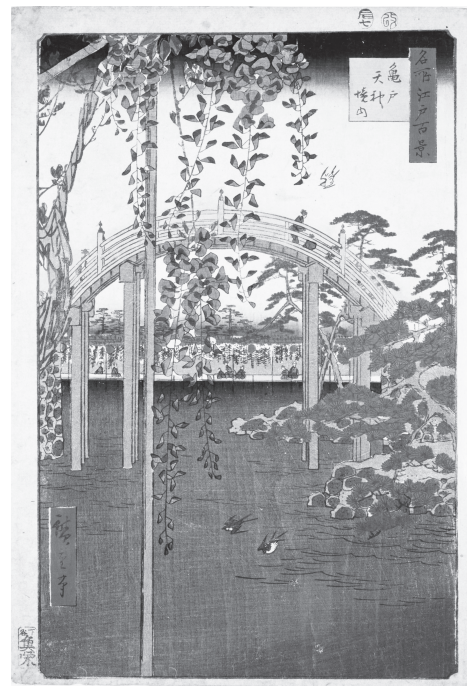
亀戸天神社は、寛文2年(1662)の創建といわれています。寛文3年に神殿や反橋、心字池などが、すべて九州太宰府天満宮を模してつくられました。菅原道真を祀っていることから、学問の神様として江戸庶民の信仰を集めます。また、江戸で随一の藤の名所でもあります。

亀戸天神社は表門をくぐると周りを藤棚に囲まれた池があり、そこに傾斜の激しい太鼓橋が架かっています。上図は、藤棚から垂れ下がる藤の花を描くとともに、池に架かる太鼓橋の下から藤棚の下の縁台にいる花見客をのぞいている様子が描かれています。

現在でも藤の時期になると多くの人が集まり、上図のような景色を窺うことができ、当地は江戸時代から続く名所として知られています。

5. 五百羅漢寺

羅漢寺は、江戸時代前期に松雲元慶(1648～1710)を開基として本所五ツ目に創建された寺院で、五百羅漢像が祀られています。境内には三匠堂という三層の堂宇があり、廊下が螺旋状になっていること



歌川広重「名所江戸百景 亀戸天神境内」
安政3年(1856) 国立国会図書館蔵

から「栄螺堂」と呼ばれています。

堂内には観音像が安置され、これらを回ると自然に最上階に達するようになっていました。上層には廻り縁を巡らし、正面は張り出して舞台になっており、参詣者たちが眺望を楽しみました。

浮世絵のなかでは歌川広重の「東都名所」や「名所江戸百景」、葛飾北斎の「富嶽三十六景」などに描かれています。そこには、三匠堂での眺望の様子や、羅漢寺周辺の様子などが描かれています。

羅漢寺は明治41年(1908)に下目黒(目黒区)に移転していますが、元々は太鼓橋3・4丁目付近にあり、現在跡地には石標柱がたっています。

江東地域には、寺や神社が多くあることから人々が訪れ、そして浮世絵の題材として描かれました。

江戸時代の寺や神社の多くは、時代の変化や戦災、震災等で失われたものも少なくありません。浮世絵は、江戸時代から現在へと寺や神社などの様子や当時の賑わいの様子を伝えてくれています。

(松本智恵)

【主な参考文献】

小林忠、大久保純一『浮世絵の観賞基礎知識』(至文堂/1996)